

# 送別の辞



鳥井正晴

本学教授柿谷雄三先生が、平成十年（一九九八年）三月三十一日をもつて定年退職される。

先生に「送別の辞」を献じるには、私などよりもつと相應しい先達が多くをられるであらう。かうした役目が私に廻つて来たのは、たまに学科の主任であつたといふ巡り合はせであるが、何よりも私自身には、先生を語るには、それに見合ふ心の持ち合はせのないことを恐れるからである。と同時に浅薄を顧みず先生を語れる幸福を思ふ。

先生は、昭和三十七年四月、相愛女子短期大学専任講師として御着任、昭和四十三年四月には本学助教授、昭和五十二年四月に本学教授となられ、本年三月の御定年まで、実に三十六年間、営々として本学と共に歩まれた。

その間、国文学科主任はもとより、三度の教務部長、二度の図書館長、貴重図書資料専門委員代表、相愛学園評議員などの要職を歴任せ

られ、まさしく相愛女子短期大学の大学たる礎を築くにその中心的役割を担はれた。先生の足跡は、同時に我が相愛女子短期大学の足跡でもある。

先生を語るに、「春曙文庫」、貴重図書資料室を抜きにしては語れない。「春曙文庫」の誕生と、貴重図書資料室の開室は、田中重太郎博士の薫陶を得られた、柿谷先生の並々ならぬ御尽力をして初めて実現し得たものである。

「春曙文庫」の学として持つ意義の大きさは、広く国文学界に知られるに至っている。

京極為兼の叙景歌の特質は、細やかで清澄で気品のあるものだと言へる。まさに先生は、為兼の叙景歌のそれの如く、細やかで清澄で気品のある端正な「学校の模範教科書」のやうな御仁であられた。私の知る先生は、それ程長くはないのだが、最近、益々もの静かに端正になられた気がしてならない。

このところ、会議の多い国文学科は、「会議学科」と名称変更してしかるべきと思ふわけだが、その会議の席で、したり顔に我が大学の将来構想を語る我々の暴言を、先生は、しかし静かに聴いてをられる、深い御思索と広い御実績を蔵された静謐な眼差しをもつて。

先生のことを語らうと思へば、いくらでも語れる気がするが、そんな甘い言葉で送られては、「かなひませんね」と云ふ苦笑された先生の京訛りの言葉が、聞こへてきさうである。